

発明文化論

〈第 65 回〉

丸山 亮

和洋併置式

不忍池へ花見に出たついでに、近くの旧岩崎邸とその庭園を見た。洋館は三菱財閥の岩崎家本邸として明治 29 年に完成し、英国人建築家のジョサイア・コンドルが設計している。コンドルは明治 10 年、日本政府の招聘により来日して工部大学校の初代教授に就任、門下からは東京駅を設計した辰野金吾や赤坂離宮の片山東熊などを出しているの、その洋風建築の源流をたどることになる。

裏庭から洋館の南側を望むと、1 階、2 階は列柱が並び、ルネサンス風が強く感じられるが、どこことなく既視感がある。インドやシンガポールなどで見かけるヴィクトリア朝の様式を反映した建物に通じているからだろうか。おそらく 19 世紀末には世界各地でこうした英国趣味の建築がはやったものと思われる。庭の片隅にある満開の桜が洋館に華やぎを添えていた。

内部は木造の床、階段、天井にいていねいな意匠がほどこされ、洋風の生活を楽しむには申し分のない空間だ。また、壁紙には金唐革紙と呼ばれるものが使われている。中世ヨーロッパの館を飾った壁紙を明治の日本が模し、厚い和紙へ凹凸を施して着色することで革紙の質感を出す。一時はヨーロッパへも輸出されていたようだ。この紙を使った部屋が少しだけ残ったが、他は戦後、進駐軍に接收されたとき破損したため、現在は復元された金唐革紙に張り替えられている。コンドルは自ら設計した鹿鳴館やこの岩崎邸に、思い通りの壁紙が手近に得られて喜んだろう。

旧岩崎邸の見どころはこの洋館と並んで、隣接する純和風の建物だ。大工棟梁として名のあった大河喜十郎の施工と伝えられ、当時は洋館以上の規模だったという。書院造りを基調にした広間には橋本雅邦の障壁画が残っている。欧化を急ぐ明治人には、洋館を建てたいという強いあこがれがあったろうが、和風の生活を捨てるのでなければ、和の居住空間を確保しておきたい思いも強かった。それは和洋を折衷させるのではなく、併置という方法によっても実現された。純和風と純洋風が無理なく併置されているのがこの岩崎邸でもある。

旧岩崎邸に向かう数日前、千葉市稲毛にある旧神谷伝兵衛の別荘を訪れた。電気プランの神谷バーや蜂蜜葡萄酒とともに語られる実業家神谷の別荘で、この方は岩崎邸の 22 年後となる大正 7 年の建造という。洋風の建物 1 階の、ロマネスクのアーチと列柱によるピロティーが目を引き付ける。この邸宅は千葉市で最も古い鉄筋コンクリート造りといわれ、そのおかげで 5 年後の関東大震災にも耐えている。和風の庭園は当時の稲毛海岸の景観と馴染み、またここに洋館があっても違和感はなかったろう。

重厚な造りの 1 階は客間で、寄木張りの床や絵描きタイルのマントルピースは洋風をよく摸している。そして細身の手すりに導かれ木造の階段を上ったこの建物の 2 階こそは、真骨頂とっていい。完全な数寄屋風の和建築なのだ。中心の広間で床柱に太い葡萄の木を使ったり、欄間に蜂や葡萄の透かしを施したのは神谷の実業家としての誇りを示す。それを縁取る廊下の窓からは、庭と、後に埋め立てられる海が間近に望まれたらう。残念なことに設計者の日本人が誰だったか今日ではわからないが、国登録の文化財にふさわしいたたずまいだ。この建物も、和洋を上下にうまく併置しているのが注目される。

上下階に異なる様式の建築を施した例としては、金閣寺が思い浮かぶ。三層の楼閣のうち、初層は貴族趣味の寝殿造り、二層は武家風の書院造り、そして最上部の三層は禅宗風の仏殿で仏舎利が安置されている。和風と中国あるいは天竺の趣味が併置されていることで、神谷伝兵衛の別荘の精神に通じるものがある。

このほど建て替えられた新歌舞伎座は、29 階のタワービルを後ろに控え、桃山様式の破風屋根をシンメトリーに配した華麗な正面を持つ。ここにも和洋を併置する日本人の知恵が発揮されている。

(まるやま りょう 共生国際特許事務弁理士)